

(成果情報名) 堆肥施用と黒マルチによる促成用タラの穂木養成		
[要約] タラ苗「新駒」定植時に10アール当たり2トンの堆肥を施用し、黒マルチして栽培すると、収穫茎が長くなり有効着生芽数が増加する。また、着生芽の芽長、芽幅が大きくなり不良芽が減少する。		
(研究所名) 山間地帯特産指導所	成果 区分	普及(情報)

1. 背景・ねらい

直売品目の長期間かつ安定的に収穫可能な栽培技術が求められており、タラの木の簡易な促成栽培技術と併せ、促成栽培用穂木の養成法の確立が必要である。

そこで、タラ「新駒」の穂木養成のための堆肥施用とマルチの効果について検討する。

2. 成果の内容・特徴

1) 茎長、一茎重、茎径、及び一茎当たりの着生芽数は、1年生樹、2年生樹共に同様の傾向を示し、堆肥+マルチ区が最も優り、次いでマルチ区、堆肥区の順で、無処理区は極めて劣る。(表1、表2)

2) 着生する一芽の大きさは、堆肥+マルチ区が最も優れ、堆肥区、マルチ区では差がみられないが、無処理区は劣る。(表1)

3) 一茎当たりの着生芽数は、マルチ+堆肥区とマルチ区は同等、堆肥区と無処理区は劣る。

一茎当たりの不良芽(促成不適芽)数は、マルチ+堆肥区とマルチ区は少なく、堆肥区と無処理区で多い。(表1、表2)

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 堆肥は完熟牛糞堆肥を用い、全面散布後に耕起して苗を植え付ける。
- 2) 苗定植時に被覆したマルチフィルムは張りっ放しで翌年も栽培する。
- 3) 施肥、病虫害防除等は、耕種基準に準ずる。

4. 具体的データ

表1 マルチ、堆肥施用と収穫茎及び着生芽（1年生）

試験区	茎長 cm	一茎重 g	茎径 mm		一茎当たり 着生芽数(芽)	不良芽 芽	芽長 mm	芽幅 mm
			株基部	頂芽下				
堆肥+マルチ	78.6	329	31.4	22.9	20.4	1.1	17.5	12.9
マルチ	52.8	145	23.7	20.3	17.2	1.4	15.1	9.9
堆肥	32.6	87	21.1	20.0	11.4	3.5	16.0	10.8
無処理	10.5	19	13.9	16.1	5.2	5.2	8.0	6.2

注)1. 供試品種「新駒」 2. 元肥;牛糞堆肥(T-N:0.91%)2t/10aのみ 追肥;液肥(10-10-10)5kg/10a
 3. マルチ資材;黒ポリ0.02mm 4. 上記の計測値は20個体の平均値
 5. 径3mm以下の弱小芽 (調査日;平成16年1月7日)

表2 マルチ、堆肥施用と収穫茎及び着生芽（2年生）

試験区	茎長 cm	一茎重 g	茎径 mm	一茎当たり着生芽数(芽)		
				合計	促成可芽	不良芽
堆肥+マルチ	176.0	967.6	40.0	24.6	24.6	0
マルチ	162.0	873.8	35.3	23.4	23.4	0
堆肥	105.8	220.8	25.9	14.2	11.8	2.4
無処理	101.4	213.2	24.8	13.2	11.4	1.8

注)マルチ資材;黒ポリ0.02mm 表2を無肥料で栽培 径3mm以下の弱小芽 (調査;平成17年2月3日)



図 マルチ、堆肥施用と2年生の収穫茎(平成17年2月)

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

山間地帯特産作物の天然資源を利用した促成栽培技術の開発・2001～2004年度